

を余儀なくされたりするのでこのようなフィードバックは是非必要である。また、経済指標のデータ吟味、系列化をする場合に著者の行った如く制度的、経済史的な研究を十二分にしておくことがとくに重要と考える。財政金融の分野においてはそれが一層重要で、制度的変遷は計数に大きな変動を及ぼす。したがって、制度史的な研究が資料の吟味と同様に重要となり、その為には経済史的な研究も不可欠となる。たとえば、新たな制度が出来たことによって計数にジャンプが起るのでその制度の変遷を承知しておかねばならない如くである。丁度著者が、本書 209 頁で、新たに資料が出来てくる時、一度に当該系列が増大するので数字にジャンプの生ずることを指摘しているが、同様のことが制度的変革においても起る。又一方、経済史的な事実を究明しておくことは分析段階に入っても不可欠のこととなる。

江見氏の推計手順はこのような角度からみても高く評価されねばならない。

つぎに本書の分析結果であるが、著者も本格的な分析は今後といっているが、ここに示された資本形成の計数の信頼度は高く、1887—1914 年をⅠ期、1915—1940 年をⅡ期として GNP と資本形成の実質成長率を対比し、さらに政府と民間のそれを比較した結果は興味深い。すなわち、「政府と民間を比較する場合に政府の非軍事と民間を比較すると全期間では政府が 1% ほど民間を上回っているが、Ⅰ期では政府がリードし、Ⅱ期には非軍事の資本形成に関する限り民間に主導権が移っていること。しかし軍事を含めた場合にはⅡ期でも政府の方が民間の成長率を超過していること」等々ファクトファインディングとして興味深い。

以上本書の特徴的な点を述べてきたが、本書が従来みられなかった資料的価値を有することは議論の余地がないと信ずる。とくに 5 年ごしに明治以降の通貨統計を作成している評者にとって、基礎資料の吟味の重要性和その労苦をなめている点で江見氏の苦勞と業績は身にしみるものがあるが、資料的観点から 1 つ 2 つのことを述べさせて戴く。

1 つの経済指標の系列について基礎資料の間に計数の不一致がみられる場合があるのでできれば必ず複数の資料で同じ経済指標の系列をチェックすることを提案したい。すなわち資料同志のチェックであるが、その不一致の解明はカバレッチの相異とか或は制度的経済史的な究明によって解明される。それでも解明されない場合は、たとえば大きい方の数字をとるというように約束ごとをつくっておくこと。また同一資料間でも発行年次によ

て計数の異なる場合の処置についてもその解明がなされぬときは収録すべき計数の年次に近い発行年次のものをとるとか、最も新らしい刊行年次のものをとるとか約束事をつくるべきであろう。

江見氏も経済指標毎に複数の資料を十分に吟味をされているが、第 3 部の資料編には 1 つだけしか示されていない。これはおそらく頁数その他編集上の制約によるものと思われるが、複数の資料を示すべきものもあったのではないかと考える。著者御自身も推計編では Alternative を出しても、資料編では Alternative の中から 1 つのみを抽出したといっておられるが、この種の著書においては複数を示すことが重要と思う。

つぎに、著者は本書において資本形成を主体別には政府と民間、機能別には建設と設備に分けて章表しており、産業別資本形成という観点が少いので、今後コモ法によって導かれた生産者耐久施設を品目によって産業別に振り分ける作業をしたいといわれているが、是非それを期待すると共に、さらにコモディティアプローチとマネタリーアプローチの突合にまで進まれることを願って擱筆する。

【朝 倉 孝 吉】

山 田 秀 雄

『イギリス植民地経済史研究』

岩波書店 1971.3 204 ページ

(一橋大学経済研究叢書 24)

よく言われることだが、一冊の本に著者の全てがこめられているものとすれば、本書の読者はよほど注意してかからねばならない。元東大総長が見当違いの書評で失笑を買ったあの龐大な『社会科学年表』の編者で、ミークの訳者が本書の著者だからである。つまり、本書を小冊子と気を許してはならない。というのは、著者の関心と経歴、その思想と蓄積とが注意深く読めばうかがい知れる労作であるからだ。

本書は個別に執筆された大小五篇の次のような論文から成り立っている。

第 1 章 1870—1913 年の期間におけるイギリスの資本輸出と植民地

第 2 章 第 1 次大戦直前のインドの国際収支

第 3 章 マラヤの植民地化の起源と錫

第 4 章 ガーナ社会経済史覚書

第 5 章 南ローデシア隔離政策小史

これらの論文のそれぞれは手堅い専門家的な手法に徹しているのに、本書全体を貫徹する問題内容の全貌は通読したくらいではわからない。高度に専門的なこの「叢書」のうちでも特に不愛想なものという感じを否めない。ここに収められた個々の論文について何がし専門家風に、ということは部分的にということだが、論評する人も多だろうが、全体を展望し個々の事実問題と論理の展開において著者と対等の水準で書評の理想を開陳できるほどの人は、私には思いあたらない。それが本書と著者の不運なる所以であろうが、また名誉かも知れない。

本書は要領のよい要約を拒絶する論文集だが、それこそが著者のひそかに意図し周到に苦心を払ったところならば、読者はそのワナにはまらない努力に疲労させられる厄介な労作でもある。

たとえばこうだ。通例のイギリス植民地経済史論ならば、本書の各所で引用・参照されている文献や資料からイギリス資本主義の発展過程を概観し、資本輸出や原料供給地・工業製品市場としての植民地経済の種々相を特殊問題ごとに構成し、あわせて帝国主義政策の曲折と展開を記述するということになったであろう。植民政策を政策担当者の意図とその時代相の交錯の上に実証的な研究を積みあげるのが英国のアカデミーでも主流をなしている。そうした研究の大勢にあえて抵抗し、「帝国主義の実践」過程を植民地に残る「爪跡」の方から辿っていくという、いわば逆の途をとっているところに本書の意義があり、ともすれば政治評論・民族運動論に終る弊を免れているところに真価がある。

著者は、読者に帝国主義「論」の通説について正確な認識があるものと前提して叙述をすすめているから、たとえば概説風な記述の部分にしても、その学説史的吟味に留意していなければ、著者の装置したボレミックがわからなくなる。理論問題・現地事情・研究史などで読者はさまざまに著者からテストされる仕組みで、概論的な知識を期待した読者は失望させられると同時に著者から落第点をつけられるハメになる。本書を不愛想という所以である。著者は、通説に一定の歴史的枠組みを設定することによって結果的にはこれを補強し再確認しているのだが、いわゆる実態調査や実証研究なるものが事実の迫力によって理論をくつがえすかにみえるその論証の虚構と論点の移行を執り出すことによって、理論把握の衰弱と実証主義論者の方法的錯誤を鋭く突き通説の通俗化をたしなめながら、理論の理論性を回復させている。だが、通説の平明な解説はないから、たとえば第一論文などは尻り切れとみるむきもあるかも知れない。

* * *

著者が本書で試みている作業は、純技術論的にも負担の大きいものである上に、問題視角の構築そのものも作業過程で再三の修正を迫られながら充実するものだから、時間と労力を奪うこと多大で、業績競争の激しい社会ではまことに割の悪い企てである。

もともと寡作・遅筆の著者ながら、実に30年もあたためた部分さえあることに読者の注意を促したい。マラヤ論文がそれで、著者は二度にわたる現地調査のことなど全く語らずに冷静な解析をすすめている。しかし時に格別の迫力で噴出もする。マラヤ植民地化の過程におけるベナン占領の意義について、日本でも東南アジア史研究の先達として知られているホルの通説にかみついた異端の史家トレゴニング(かれは独立後もシンガポールに最後まで残った白人教授だった)の提起した論点を、見当違いの誇張はあるにもせよ通俗的な史家の実証主義がもつ無問題性と論理的な撞着を鋭く突いたものとして高く評価し、他方で問題を著者の観点から再転回させるころは本書の一番読みごたえのあるところのひとつだ。

またガーナ論文にしても、有名な Monthly Review 誌の論文への疑問から説き始め、奇態な資本主義をふりかざす女流人類学者ヒルの実態調査を入念に分析しなおし、植民地体制下での資本主義の展開をスツール・ランドという部族的土地所有(=未耕地)との関連で論証するくだりも本書の白眉といえよう。書痴的なまでに手広く文献を調べ、現地踏査の経験をふまえて入念に組みなおすこの構成を、例によって仮説視するアフリカニストもいるが、私の知るかぎり、反論は構想・資料解析・方法操作の何れの点でもとおく著者に及ばない。

著者の資料への執着は、理論問題とは逆に、文献的にはまことに親切で正確であることに最もよく示されている。だが、インドの国際収支問題についてだけは、いわば発掘的な資料を用いていることに著者は全くふれていないので、あるいはインド研究・経済問題の専門家でも見落としがちではないかと思う。

また、植民地といっても具体的な形成史がさまざまであることを、ガーナとならんでローデシアという白人入植者による植民地資本主義の展開(土地収奪と労働力の強制徴用)の例を示すことによって、既存の政治体制を利用する型とは別な直接入植・直接支配の型を、アフリカという巨大大陸の地理と歴史に二重写しにしてみせることで、植民地における独立運動の例外的事例が出現する構造的必然性を明らかにしている。

* * *

総じて、著者は、ふくらみに乏しい経済学帝国主義論者ではないことをさまざまのところで示しているが、経済を根柢ないし外殻とし、その制約内で可能になる政治という主体的な決断と選択のもつ方向規定性を重視し、この両者に規定されながら両者に一定の規定力として作用する伝統文化の存続と変容に関心をむけているところに、ひとはあるいは理論と歴史と政策の三位一体論的な総合への志向を読みとることさえできるかも知れない。別に言えば、体制・民族・階級という三者の立体交叉点に各後進社会像をとり結ばせようとしているらしい。と言うのも、この種の専門書では、そうした構成論的立論が素人っぽく書生的な企図として排斥されるのが常であり、何よりも、本書は八方破れになるのを承知で上記の視座を徹底的に作業化の中心に据えているものではないからであって、あくまでもそ知らぬ装いをこらした小品集に仕立てあげられているからである。

そのレイアウトの座標軸は非マルクス主義者の帝国主義論、とくに学説史家の間では定評のあるホブスン研究であって、これがかえってレーニンの理論枠を暗黙のうちに確認させながらも、教条的なレーニン主義論者への批判となっている。

それを著者の具体的な関心の諸相に合わせて非経済学論的に言えば、アジアとアフリカとを繋げるものと分かつものとを併せ採り込む論理とアジア・アフリカの各国社会を個別研究の対象とするさいにみせる豊かな感受性を介して統合を試みたものが本書である。

このA「と」Aの発想における併置のメカニズムが帝国主義の理論問題であり、AとAとが構成的に併置されても各国の歴史的・社会的な内実は決して安易な等置を許さないものであることの指摘が植民地各国論である。

そこから、南半球全域にわたってナショナルな運動が発生する必然性と、各植民地社会の発展段階に対応して階級的に輻輳・屈折した諸位相が混乱そのものの如くに浮上することをとり出し、その総体のうちに時代史の構造的な制御が文字通りに実現していることを著者は言いたいのである。

重ねて言うが、そうした企てがこうした言葉で明示的に語られているのではない。むしろそれは、この五篇を「総括する論文」が著者によって「用意」されていながら、本書には収められていないことの理由を、経済学の collected essays には収めきれないものであった筈だという評者の推断から、そう言っているのである。その点から、本書は来るべき大著ないし一連の研究を予告するものとして受けとめることで、読者は期待権を確保し著者は発表責任を自認したことになろう。とすれば、分断された技術的な詮索をこえた本書の書評は末だ時期尚早ということになるのではないだろうか。

著者には、この他に英文で発表されたブーケ論や戦後アメリカのインドネシア研究に一段階を画したギアツの人類学的社会史論へのコメント、さらに国際会議に提出された日本の農地改革にかんするフィールド・ノートなどがあるけれども、その存在について全くふれていないのも時期尚早論を補強する。そして、著者との対話では地球大の規模で縦横に展がり魅力ある仕方で奔流する話題の全てが、ここでは姿をみせていないからでもある。「生と学との距離」にしてしまってはならないものまでが沈黙させられているのは惜しい。

最後に誤植を一つ。60 ページ「18 世紀末から 20 世紀初めにかけて」は文脈からしても「18 世紀末から 19 世紀初めにかけて」の誤りである。

【林 武】